

※文字の大きさは Meiryo UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。  
 ※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、(写真1) (表1) などと文中に記載し、右ページに(写真1) (表1) などと表記の上、貼り付けてください。  
 ※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。  
 ※いずれの場合も、必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

<エントリーシート>		学校名・氏名
※事務局記入欄 No.: D-6	部門	東京学芸大学教職大学院
	活動名	授業を省察する対話の変革 対話型検討会の開発および学外連携

**課題の設定:** ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか? 視点などを含めて記載してください。  
 大学での模擬授業検討会の多くが、「こうすればよい」といった改善案の出し合いや、指導法や教材理解をめぐる持論のぶつ合いに陥っている。こうした形では、授業での出来事が大事にされず、また、各々の既存の枠組みを超えにくい。授業への浅い省察しかもたらさない。参加者にハッとさせる気づきをもたらすような深い省察のためには、従来の形に代わる話し合い方や深める感覚の獲得が必要である。それには反復的なトレーニングが必要だが、教職大学院がそれを組織的に行ってきた例はこれまでにない。また、上述の検討会の課題はまさに学校現場が抱えているものでもあるが、そのために院と学校が連携する取り組みもこれまで存在しなかった。

**方針・計画:** ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。  
 ①教職大学院の学部卒院生向け中核科目の柱に「対話型模擬授業検討会」を位置づけ、1年次から2年次前期にわたって、省察を深める対話の仕方のトレーニングを行う。「対話型模擬授業検討会」とは、模擬授業のなかで授業者役・学習者役がそれぞれの立場から感じたり考えたりしたことを出し合って、そこから問いを浮かびあがらせ、授業について探究していく検討会の形である(表1、写真1・2)。  
 ②取り組みを日常的に公開し、学外からの参観者を受け入れる。また、学校や研究会等からの要請に応じて、院生が検討会を上演したり検討会のファシリテーターを務めたりする。省察を深める対話は、手順をマニュアル化して実施・普及できるものではなく、対話に対する身体知的な感覚の涵養・共有が必須だからである。

**活動内容:** ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください  
 ①学内での取り組みは、H27年度の「カリキュラムデザイン・授業研究コース」の設置以降行ってきた。例年30名前後の学部卒院生がこれを経験してきている。1年次は必修で、春学期に3~4週にわたって計8~10回程度の検討会(うち1回は自身が授業者役)を、秋学期にはそれぞれの実習先での授業とリンクさせて同様に、2年次春学期は選択科目となっており、1年次秋と同様の実習リンク型で行っている。  
 ②H29年12月~翌年11月の計13日間の検討会実施日(うち2日は非公開設定)に、他大学や学校から計36名が訪れ、検討会の様子を見学した(表2)。学外での検討会実演やファシリテーターとしてのサポートはH29年11月に始まり、学卒2年の院生が中心となって実施してきている(表3、写真3)。

**活動の成果:** ※課題や目標に対し、どんな影響、変化があったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。  
 ①院生らの検討会は、初期と後期を比べると、より深い省察を伴うものへと変化する。具体的には、話し合いの形態が、結論(価値評価や改善案)を伴った長い発話を少ない回数行うものから、短い発話を連鎖的に大量に行い、そこで出た材料が後々結果的に結びついて重要な問いが浮上するものへと変化する。また、実習校での実践を振り返る日誌にも、検討会で身につけたような学習者視点での省察が見られるようになる。  
 ②院生らが行う対話に学校の検討会を変える手掛かりを見出して、院生らをファシリテーター等として招く学校や団体が出てきていること自体が成果である。それは、院生らの成長と学校の問題解決の両方に寄与する。これらの場に参加した学校教員からも、「新たな視点を得られる」「話しやすい」などの声が聞かれる。

**アピールポイント(アイデアや工夫):** ※3~5つ程度の箇条書きしてください  
 ・発言の連鎖によって問いを浮かびあがらせる検討会の形。 ・手順の開発にとどまらない感覚のトレーニング。  
 ・院生と学校教員が相互に刺激し合う、教師教育カリキュラムと学校との新たな連携のあり方(図1)。

**表1 従来型検討会と対話型検討会の違い**

	従来型	対話型
授業時の各メンバーの役割	授業者役は用意してきた計画を効果的に遂行してみせる、学習者役はその良し悪しを評価する	授業者役・学習者役として、「今ここ」で生じる出来事を経験する
検討会時の授業者役と学習者役との関係性	授業者役は教わる、学習者役は評価したり助言したりするという非対称な関係 	それぞれの立場から感じたことや考えたことを出し合うフラットな関係 
気付きの性質	既存の枠組みの中の気付き	既存の枠組みを超えた気付き
学ぶもの	授業の手順や指導技術	授業を行ううえでの考え方

**写真1**  
 学卒1年による検討会の様子。日露戦争を扱った高1日本史の授業で、「多角的」や「問いを立てる」ことをめぐるズレと問いが浮上。H30.7.17

**写真2** 検討会で活用される、コルツハーヘンのALACTモデルにおける「9つの問い」を活用したホワイトボード

**表2 学外からの参観者数(のべではない実質人数)**

大学教員	小中高教員	行政、他機関
兵庫教育大学教職大学院(6名)、奈良教育大学教職大学院(2名)、宇都宮大学教職大学院(1名)、弘前大学教職大学院(1名)、帝京大学教職大学院(1名)、秋田大学教職大学院(1名)、明治大学(1名)、青山学院女子短期大学(1名)	東京学芸大学附属高校(2名)、東京都立淵江高校(3名)、東京都立国際高校(1名)、東京都立日野台高等学校(1名)、東京都立川国際中等教育学校(1名)、聖学院中学校・高等学校(1名)、中央大学附属中学校・高等学校(1名)、目黒学院中学高等学校(1名)、埼玉県立所沢北高校(2名)、埼玉県立松山高等学校(1名)、お茶の水女子大学附属中学校(1名)、三鷹市立第四小学校(1名)、お茶の水女子大学附属小学校(1名)	教職員支援機構次世代型教育推進センター研修協力員(2名)、埼玉県川越市教育委員会(1名)、教育関連企業(2名)

**表3 主な学外との連携の実績**

活動	日時	院生参加人数
淵江高校の校内研修へのサポート	H29年11月10日(金)	5
	H30年11月6日(火)	3
聖学院中高の校内研修へのサポート	H30年7月13日(金)	2
	H30年9月26日(水)	2
東京学芸大学附属高校の公開研へのサポート	H30年11月23日(金)	8
都国研(東京都高等学校国語教育研究会)の研究協議会へのサポート	H29年11月4日(土)	10
	H30年10月27日(土)	3
日本教師教育学会大会における検討会実演	H30年11月14日(水)	2
三重大学教職大学院の特別授業での検討会実演	H30年9月29日(土)	9
	H30年11月15日(木)	6

**写真3**  
 淵江高校校内研修における小グループに分かれた検討会  
 H30.11.6

**図1 教師教育カリキュラムと学校との新たな連携のあり方**

参考: 渡辺貴裕、岩瀬直樹(2017)「より深い省察の促進を目指す対話型模擬授業検討会を軸とした教師教育の取り組み」『日本教師教育学会年報』第26号、136-146頁。